

ロックの観念が持つ存在論的身分

—アルノーの観念との比較的考察—

西村 正秀

ジョン・ロックの「観念」には、感覚知覚、概念、心像など多様な意味合いがあるが、本論で扱うのは、感覚知覚に関する観念である。ロックの感覚の観念は、伝統的に批判の対象として言及されてきた。その批判の一つは、観念を心的な実在的存在者として扱うと、外的対象の直接知覚が不可能となり、外界に関する知識が懐疑に付されるという、いわゆる「知覚のヴェール論」的批判である。そこで、この困難を回避する為に、現代では様々な再解釈が提出されている。その中に、最もラディカルなものの一つとして、ロックの観念を実在的存在者ではなく、知覚作用と見なし、ロックの知覚論を一種の直接実在論と見なす解釈がある⁽¹⁾。その際、引き合いに出されるのが、アントワーヌ・アルノーの観念説である。彼は、心と物体以外の第三の実在的存在者である表象 (*être représentatif*) として観念を定立したマルブランシュを徹底的に批判し、観念は知覚作用であると主張した（以下では観念を作用と見なす理論を便宜的に「作用説」として言及する）。この作用としての観念という見解は、デカルトにより既に部分的に提出されていた。デカルトから影響を受けたアルノーはその見解を徹底化したのである。そして、ロックの観念に、アルノーの観念が持つ作用的側面が認められると主張する研究者も少なくない²。本論の目的は、ロックにおける感覚の観念が持つ存在論的身分を明らかにすることである。そこで、最初に作用説をアルノーの知覚論を基に説明し、その後、ロックの観念説を作用説に帰すことが本当に妥当であるのかを検討する。私が以下で主張したいことは、ロックの観念説は作用説との親近性を持ちつつも、ロックが観念と外的対象との関係に対して与えている説明から見れば作用説とは異なる仕方では解釈されるということである。

1. アルノーにおける作用説

アルノーは、その著作『真なる観念と偽なる観念について』(1683) (以下、VFIと略記)において、彼の観念説を展開している。この作品はマルブランシュの『真理の探求』(1674～75)での主張、特に、全てを神の中に見るという主張に対する反論であり、観念の本性に関する議論も、マルブランシュの観念説に対する批判という形で提示されている。以下では、本論に必要な部分、つまり、(1)アルノーの観念が持つ存在論的身分と、(2)アルノーの観念説における知覚の直接的対象という点についてアルノーの観念説を検討する⁽³⁾。

まず、(1)について考察する。アルノーは表象的存在者としての観念の誤りを幾何学的に証明できると考え、VFIの第五章で、その証明における原理としての定義を挙げている。そこでアルノーは、心が思考する実体であること(def.1)、「思考すること(penser)」と「知ること(connoître)」と「知覚すること(apercevoir)」が同じであること(def.2)、対象の観念と対象の知覚とを同一視すること(def.3)を前提として、自分が否定する観念の在り方を次の様に述べる。

「(def.7)私が表象を余分な存在者として拒絶する場合、私が表象によって理解するのは、知覚として理解される観念とは実在的に(réellement)別であると想像されるものだけである。私は表象、あるいは、表象の様態が存在することを否定してはいない。というのも、私は自分の心に生じることを反省する全ての人にとって、全ての我々の知覚は本質的に表象の様態であることは明瞭であると信じるからである」(VFI,p.199)。

ここで知覚として言及されているものは心の作用である(アルノーが認める表象が何であるかは後で考察する)。アルノーの観念は心の変様(les modifications de notre ame)であり(VFI,p.198)、彼の批判は観念を心からも物質の対象からも独立して存在する実在的存在者と見なす点に向けられている。

アルノーは、マルブランシュを含め、哲学者が観念を知覚作用とは別のものであると見なしてしまうのは幼少時の偏見に基づく二つの理由によると説明する(VFI,pp.190～194)。第一は、対象を見るためには、その対象は我々の目に現前していなければならないという考え方である。第二は、可視的对象を表象する鏡や水を見る経験から人はその対象自身ではなく、その対象の像を見ていると考えるようになるということである。後に、小さすぎたり、空気の様に不可視であったり、遠すぎたりする事物を知るようになり、人は、対象を目ではなく心で見るという考えに達する。その考えが第一の偏見と合

わさり、心で見るとためには対象は心に現前してはいなくてはならないという考えとなる。しかし、物質的对象は心が存する位置から離れた場所に存するので人は心に目と同じ類比を適用し、心に現前する対象は、認識主体から離れている物質的对象を表象する実在的存在者としての心的な観念となるのである。

このような考えに対するアルノーの攻撃は、物体と心との類比を否定するという仕方で遂行される。アルノーはデカルトの心身二元論を受け入れるが、その際、実体として本性が異なる物体と心との類比を用いることを厳禁する(VFI,p.192)。「現前」という語に関しても、この誤った類比に基づく曖昧さの存在が指摘される。

「…現前という語は、物体に関しては場所的現前を、心に関しては表現的現前(*présence objective*)を意味し、…後者によると、対象は、それらが我々の心に表現的に存するとき、つまり、それらが心によって知られるときに、我々の心の中に存すると言われる…」(VFI,p.216)。

この箇所ではアルノーは、物体の場合に適用される場所的現前は知覚にとっては無関係であり、対象が知覚されるためには、その対象が心に認知的に現前することが要求されると主張している。アルノーは知覚の機構を、知覚する心、観念(知覚)、知覚される対象の三項から説明するが、そこに登場する実在的存在者は心と対象に限られるのである。ただし、知覚と観念が心の同一の変様であるにもかかわらず、彼が知覚と観念という語を使い分ける理由は、前者が知覚する心との関係を、後者が知覚される対象との関係を、それぞれ強調するためにである(VFI,p.198)。

しかし、知覚される対象が表現的に心に存するとは何を意味しているのであろうか。アルノーは「私があるものを理解する(*concevoir*)とき、そのものは表現的に私の心に存する」と言う(VFI,p.198)。「私が太陽や四角形や円を理解するとき、太陽や四角形や円は私の心の外に存在しようとしなくとも、私の心の中に表現的に存在する」(*ibid.*)。「表現的に心の中にある」とは、アルノーにとって、「理解されている」ことを意味しているのであり、ある対象を知覚すること、ある対象を表現的に心の中に持つこと、ある対象の観念を持つことは同義である。

ここから、上述の引用(def.7)における、観念を表象と見なすという彼自身の主張も作用説の方向で理解できる。本質的に表象的様態である観念が知覚作用であるならアルノーの言う「表象」も作用を意味し、そこには表象的存在者は含まれない。つまり、観念と知覚と表象は同義なのである。このアルノーの主張に、もし一種の奇異さを感じるなら

ば、それは「表象」によって、物体レベルにおける表象を連想するからである。しかし、ここでも、アルノーは観念による表象と、鏡や言葉による表象との類比を禁じる。心の中に表現的に存在する仕方は、心や思考の本性に貢献する、心と思考に特有の要素であり、心とは本性が異なる物体にはその要素は存在しない(VFI,p.199)。アルノーは「表現的に心の中にある」ことを「知的に(intelligiblement)心の中にある」と言い換える(VFI,p.200)。心の直接の対象である物体は、知覚作用と相関することによって、知覚内容として心に認知されるのである。

では、この認知されている知覚内容の存在論的身分は何であろうか。知覚論では、錯覚や幻視における知覚内容の説明が求められる。アルノー自身、我々の知覚は全て本質的に何かの知覚であると主張する(VFI,p.184)。しかし、アルノーは知覚内容を説明する為にマルブランシュの観念を知覚作用の相関者として定立できない。そこで知覚作用としての観念は同時に知覚内容をも兼ねることになる。アルノーは、表現的に心の中にある限りでの知覚対象、つまり、知覚内容と、その対象の観念とが同一であることを認めている(VFI,pp.199~200)。本質的に表象の様態である知覚作用としての観念は内在的に表象機能を有し、志向内容として知覚内容を常に内属させる。それゆえ、知覚作用はそれに内属する知覚内容に応じて、それ自身で個別化される⁴⁾。知覚内容と知覚作用とは存在論的に同一の心の変様なのである。

以上のような存在論的枠組みが与えられた場合、(2)の、知覚において何が心の直接的対象であるのかは既に明確である。マルブランシュは、観念を心や物体から独立の實在的存在者と見なし、心の直接的対象を観念とした。しかし、アルノーは、その場合、外的対象の知覚が不可能になると批判する(VFI,p.229)。アルノーにとって、知覚の機構は存在者としての観念を導入しなくても説明可能であり、知覚における直接の対象は物体なのである。たしかに、アルノーも、知覚における心の直接的対象は外的事物の観念であり、外的事物は心の間接的对象であるという、一見、彼の直接實在論と対立する表現を認める場合がある(VFI,p.203)。しかし、アルノーの意図は、この疑わしい表現が作用説の立場から再解釈され得ることを示すことにある(ibid)。アルノーの観念は表象の様態であった。さらに、観念は本質的に自己反省的である(VFI,p.204)。ここから、知覚作用としての観念が向かう知覚内容は、反省される観念それ自身、換言すれば、知覚される事物の表現的實在性であると言い得る(ibid)。それゆえ、知覚における観念の介在が強調される場合には、問題の表現は可能であり、それは物体を心の直接的対象とする彼

本来の主張と撞着しない。

以上から、作用説の特徴は次の様に要約できる。(A1)知覚の機構の説明で用いられる実在的存在者は心と物質の対象に限られる。(A2)観念は知覚作用であり、外的対象に関する正常な知覚での心の直接の対象は観念ではなく物質の対象である。(A3)物質の対象は観念によって表象され、我々に認知された限りでの対象として直接的に知覚される。(A4)知覚作用と知覚内容とは存在論的に同一である。

2.ロックにおける「知覚」と「心の中」

ロックの観念の本性を吟味する前に、二つの予備的注意をしておく。一つは、ロックによる「心」の概念は確定的なものではないということである。ロックは心が非物質的の実体であることの必然性について、神の全能性を理由に、疑いをかける（『人間知性論』(1690)、(4.3,6)。以下、『人間知性論』からの引用は、巻・章・節の数字のみで表す）。さらに、属性を支える基体という伝統的実体概念も、経験から不可知であるという理由で、認識論的には否定される(2,23,1)。しかし、一方でロックは、心的能力の主体が存在することは否定しておらず、むしろ、非物質的存在者としての基体が存在することを積極的に主張している場合もある(2,23,16)。この、ロックによる心身二元論に対する曖昧な態度は、観念の存在論的身分に関する不明瞭さを引き起こす（この件に関しては、第三章で考察する）。

次に、私が以下で考察する感覚の観念とは感覚の単純観念のことである。単純観念とは我々が感覚あるいは反省から受け取る、心の中においてそれ自身は複合されていない様な現象態あるいは想念である(2,1,2)。この単純観念を複合することにより実体の複合観念が作られる。前者の例は、延長、大きさ、青色などであり、後者の例はリング、机などである。実体の複合観念の組成が単純観念である以上、両者の存在様式は同一であり、本論ではより基礎的である単純観念のみを考察すれば十分である

では、ロックの観念の存在論的身分は何であろうか。『人間知性論』の導入部でロックは観念を「対象」として定義している。

「それ〔観念〕は、人が思考するとき知性の対象であるものを表すのに最も役立つと私が考える語であるので、私はそれを、心像、思念、形象によって意味されるもの、あるいは何でも、思考する時に心が携わるものを表現する為に用いた」(1,1,8)。

実際、他の多くの場合でも、ロックは観念を「知性（あるいは思考）の対象」として

言及している(2,1,10)(2,8,8)。しかし、それだけでロックの観念が実在的存在者であると結論するのは早計である。なぜなら、よく指摘されるように、ロックが言う「対象」は、それだけでは特別な存在論の規定を受けていないからである。上述の(1,1,8)からも明らかなように、観念は「知性の対象」としてのみ規定されている。その場合の「対象」とは単に知性が向けられているものという意味であり、それが心や物理的对象から独立の存在者であるか否かということは含意されていない。そこで、ロックの観念の本性を特定するために、語の使われ方を確認することにする。ここで、問題なのは「知覚」と「心の中」であろう。なぜなら、これらの語の解釈次第で、観念は作用とも実在的存在者とも見なされ得るからである。

(1) 「知覚」

観念に作用と対象の両方の意味があり得ると同様に、知覚にも知覚作用と知覚内容という二つの意味があり得る。ロックも知覚という語を両方の意味で使用している。しかし、知覚と観念が同一の意味で使用されている場合は、知覚は、一貫して、知覚内容の意味で使用されている。例えば、(2,3,2,1)では、「我々の観念は我々の心の中の単なる現象態(appearance)、あるいは、知覚に他ならない」とされる。ここでは知覚は現象態と同一視されており、知覚内容を意味すると言わざるを得ない。一方、知覚が作用として言及されている箇所では、知覚と観念は置換可能なものとしては使用されていない。ロックの観念を作用説として読もうと試みる研究者が、自分の主張の根拠として、よく言及するのは次の箇所である。

「人が初めて何らかの観念を持つのは何時かと問うことは、人が知覚し始めるのは何時かと問うことである。観念を持つこと(having ideas)と知覚(perception)は同じことだからである」(2,1,9)。

たしかに、ここでの知覚は知覚作用のことである。しかし、その知覚作用と同一視されているのは「観念を持つこと」であり、観念自体ではない。そもそも、テキスト上で、ロックは、観念を知覚作用の相関者として提示することはあっても、観念が知覚作用であると一度も明示的に記述していない。それゆえ、敢えて観念を作用と同一視するためには、理論的に明確な根拠が必要である。

しかし、逆に、ロックの観念が知覚作用を意味するとは解釈できない明確な根拠がある。それは、ロックが観念を心の姿様と見なした場合に生じる問題点を指摘していることである。『人間知性論』の後に書かれた『全てを神において見るという、P.マルブラ

ンシュの意見についての吟味』(1693) (以下、EMOと略記、引用は章番号で表記)において、彼はマルブランシュの感覚(sentiment) (ロックの言う二次性質の観念に当たる)が心の変様であるという主張に反論している(39)。観念を心の変様とすると、異なった観念は異なった変様となる。一方、心は部分を持たない非物質的実体である。それゆえ、もし相反する複数の感覚の観念(白と黒など)を同時に持った場合、心は同時に矛盾する観念を持つか、心が異なる部分を持つかのどちらかになってしまう。この反論の妥当性はさておき、ロックが観念を心の変様と見なす考えを批判していることは明白である。このことは、観念が作用ではないことを強く示唆する。ロックは知覚作用の観念を心を持つ能力(power)の観念と見なす(2,21,5)。この能力の観念は、我々がある観念が他の観念へと変化することを観察することにより、その観念の恒常的変化を予測し、その変化の原因を観念に帰すことによって得られる(2,21,1)。この能力は本質的に関係を含み(2,21,3)、実体化されてはならない⁽⁵⁾。

「この機能 [能力と同義] という言葉は、…次のことがないように使用されれば、非常に適切な言葉である、つまり、…魂において知性や有為の…活動を営む、ある実在的存在者を表すと想定され(これまでではそう想定されてきたと思う)、そのため、人々の思考に何かの混乱を生むことがないように使用されれば、である」(2,21,6)。

ある対象が別の諸対象と同時に複数の関係を持つことには何の不思議もない。例えば、人は父親の子供であると同時に祖父の孫でもある。同様に、たとえ心が部分を持たないとしても、心と物質的对象との相互作用の不可能性という問題を無視すれば、心が複数の物体との関係を持つことは可能である。もし、観念が心と物質的对象との因果関係を含む知覚作用であるなら、それは心の変様であっても、非物質的実体が部分を持つという哲学的問題を引き起こさないであろう。しかし、観念は現象態としての知覚内容である。それゆえ、帰納的に獲得された因果関係の原因を単に意味する知覚作用は観念と同一視され得ない。EMOにおけるロックの批判は、形而上学的見地から、彼が知覚内容としての観念と知覚作用とを区別していることを示している。

(2) 「心の中」

「心の中」という表現にも、それを場所的な意味に解するか、あるいはアルノーのように、認知的な意味に解するかという二つの解釈が可能である。ロックの観念を作用として解釈する研究者は後者を主張してきた。たしかに、彼等が指摘するように、ロックは「心の中にある」を「理解されている」と同一視している⁽⁶⁾。

「(知性の中にあること)というこれらの語が何らかの特性を持っているのならばそれらは理解されていることを意味する。それゆえ、知性の中にあり、かつ、理解されていないことと、心の中にあり、かつ、知覚されていないことは、あるものが知性の中にあり、かつ、ないと言うことと同じである」(1,2,5)。

「ある対象の観念が心の中にある」という表現は、観念の存在論にコミットしているのではなく、むしろ、対象の認知的側面を主張しているのである。しかし、たとえ観念が理解された外的対象を意味するとしても、それだけでは、観念自身が心の中に場所的に存在する可能性は排除されない。ロックは、物体そのものとは別の存在論的身分を観念に付与し、観念が心に「現前する」と主張する。

「…心が観想するものは、心自身を除いてどれも、知性に現前しないので、ある別のものが、心の考察するものの記号あるいは表象として、知性に現前する必要があるこれが観念である」(4,21,4)。

それゆえ、ここでの解釈のポイントは、この「現前」を認知的な意味に限定できるか否かである。しかし、以下で説明するように、ロックによる、観念と物体が持つ性質との対比は、現前が認知的な意味に限定され得ないことを示唆する。

ロックは、物体が持つ性質と、我々が持つ性質の観念とを峻別する。

「心が心自身の中で知覚するもの、あるいは、知覚、思考、知性の直接の対象であるものを私は観念と呼ぶ。そして、心に何かの観念を生む能力を、その能力が存する基体の性質と呼ぶ」(2,8,8)。

例えば、雪の球を見たときに我々が持つ白さ、冷たさ、丸さは「我々の知性の中の感覚、あるいは知覚」としての「観念」であり、それらの観念を我々の心の中に生む能力が物体の性質である(ibid)。ロックは粒子仮説を物質的世界の説明として使用するので、物体は一次性質のみを内在的性質として持つ不可知な粒子の集合となる。一方、感覚の観念は、粒子の感官への衝突から脳の中まで届いた運動によって心の中に引き起こされた心的な知覚内容である。この場合、我々の知覚の直接的対象は色や形などの観念という現象態であり、この観念が介在せずに、物体そのものが直接に知覚されるということはありません(4,4,3)。さらに、周知のように、ロックは、観念と性質との類似を一次性質に関して認め、二次性質に関しては否定している。この類似の意味については本論では十分に議論できないが、少なくとも、ロックが、知覚に関して、直接実在論ではなく、表象説を採用していることは否めない。しかし、もし現前が認知的な意味合いにすぎない

いならば、アルノーの場合のように、知覚の直接的対象は物体となるはずである。それゆえ、ロックの観念が、外的対象の認知された知覚内容となるためには、心の中に、場所的に存在することになる。

また、ロックが観念と外的対象との表象関係、つまり、記号としての観念の役割を因果的に説明していることも、「心の中」の場所的解釈を支持する⁽⁷⁾。我々の知識の全材料を感覚と反省に求めるロックは、知覚に関して、心が受動的であることを強調する(2,9,1)。心は独力で単純観念を創造することができない(2,2,2)。単純観念は外的対象の感官への刺激を通じて受動的に与えられる「自然の規則的産物」でありそれを根拠に、単純観念がその原因となる外的対象と一致することが我々に認識される(4,4,4)。観念が外的対象の記号として機能し得るのも、この外的対象との一致に基づく(ibid)。それゆえ、外的対象との表象関係を有し、知覚内容を決定するのは、外的対象からの「結果」としての観念なのであり、受動的な知覚作用ではない。作用説とは異なり、ロックでは、知覚作用は知覚内容としての観念に向かう志向性を持つにすぎず、それ自身では個別化されない。観念が記号として機能し得るのは、観念が結果として心の中に場所的に産出されることによるのである。そして、この、表象機能が観念にとって外在的性質であり、知覚作用がそれ自身で個別化されないことが、ロックの観念と知覚作用とが同一視され得ない根本的理由なのである。

以上の(1)(2)から、ロックの観念は知覚作用とは区別された知覚内容であり、外的対象の表象として心の中に場所的に存在することが確認された。しかし、その場合、ロックの観念は実在的存在者となり、知覚作用と知覚される外的対象との間に、まさに余剰物として存在するのであろうか。

3,ロックの観念の心 - 依存性

ここで注意すべきことは、観念が知覚内容としての対象を意味するとしても、それは心から独立の実在的存在者ではないということである。なぜなら、観念は心 - 依存的であるからである。思考を心の本質ではなく活動と見なし、無意識の思考の存在を否定するロックは(2,19,4)、対象としての観念を持たない知覚作用の存在を認めない。逆に、観念は、決して作用から独立には心の中(ましてや、それ以外の場所)に存在しない。このことはロックが記憶に関して述べている次の箇所から明白である。

「しかし、我々の観念は心の中の現実の知覚にほかならず、それら観念の知覚がない

ときには、何ものでもなくなるので、この、我々の観念が記憶の倉庫に蓄えられていることは、多くの場合において、心が、かつて持った知覚を、心はその知覚を以前に持っていたという、その知覚に結び付けられた付加的知覚とともに、再生するという能力を持っているということを意味するにすぎない」(2,10,2)。

生得観念を否定するロックにとって、記憶において、我々が意識しない観念が存在することは容認できない。当然、我々の知覚は自己反省的であり、無意識の知覚の存在は否定される(2,1,10)。観念の存在は知覚作用の存在を必然的に要求するのである。ここから、観念はマルブランシュ的な、心から独立の存在者ではなく、心-依存的事象であることが分かる。実際、EMOで、ロックは実在的存在者としての観念の存在を拒否している。例えば、マルブランシュによると、観念は神の中にある完全な実在の対象であり、我々はその観念について完全な知識を持っていないのは、それを認識する我々の心が不完全であるからである(45)。それに対して、ロックは観念を、心の中における事物の知覚とし、観念自体が不完全であることを主張する(ibid) (基体としての実体の観念が認識論的に不明瞭であったことを想起されたい)。ここでロックが肯定する観念は我々に認知されている限りでの知覚内容であり、我々の認識から独立の実在的存在者としての観念は、観念が持つ認識論的身分という観点から否定される⁽⁸⁾。

だが、以上の帰結、つまり、ロックの観念は(1)知覚作用ではなく、(2)心の中に場所的に存在し、かつ、(3)心-依存的事象である、という三つの要素は次の問題を生まないであろうか。知覚作用は心の変様であるが、もし観念が知覚作用ではないのみならず、心の変様でもないのなら、心の中にあり、かつ心-依存的事象であっても、その存在は結局のところ実在的とならざるを得ないのではないか。

ロックの観念に関する言明の全てを整合的に解釈することは不可能かもしれない。しかし、私は、観念を知覚作用とは区別される心の変様であると見なすことによってロックの主張の大部分が理解可能になると考える。第二章で、私はロックが観念を心の変様と見なす考え方に批判的であったことを指摘した。しかし、それにもかかわらず、ロックは、度々、観念が心の変様であることを主張している。例えば、ロックは快苦の観念を「心の変様」と言い換えている(2,20,3)⁽⁹⁾。この快苦の観念のうち、痛みは、思考、あるいは、身体における変化によって引き起こされる(2,20,2)。この痛みは観念と感覚の観念が心に生じる機構は、両者とも等しく、外的対象による感官への刺激から脳までの生理学的過程を経て説明される。例えば、(2,8,18)では、マナ(食物の一種)が我々

に産む甘さや白さの感覚と、吐き気や腹痛の感覚とは、両者とも、マナの一次性質が我々の感官に作用した結果としての心的観念であると説明されている。ここから、痛みの観念が心の変様ならば、感覚の観念も心の変様となるはずである。そして、観念を心の変様と見なすことが可能ならば、観念は知覚作用の相関者として心の中に場所的に存在し、かつ、心と外的物体との間に立つ第三の實在的存在者とはならない仕方、外的対象に関する知覚内容となり得る。観念が知覚作用ではなく作用の相関者である点は第二章で既に示しておいた。

では、この私の見解に対して、上述のEMOでのロックによる心の変様批判はどう説明できるのか。EMOでのロックの発言は、たしかに、彼自身が観念を心の変様と見なしていたことと矛盾するかもしれない。しかし、EMOにおける発言の背景が、『人間知性論』におけるロックの心身二元論に対する態度とは異なり得ることには注意しなければならない。EMOでの「知覚する心」は、「一つの非物質的で分割不可能な実体」であり、ロックによるマルブランシュ批判もそのような明確な実体観に基づいている(39)。一方、『人間知性論』における心は、第二章で述べたように、思考する非物質的実体であると断言されているわけではない。『人間知性論』でのロックの目的は、我々が現実には有している観念から我々の知識が到達可能な範囲を確定することであり、観念や心や物体に関する存在論的探求は、彼の関心にはなかった(1,1,2)。(2,20,2)における快苦の観念を心の変様と見なす発言についても、その心が非物質的実体であるとは断言できない。実際、ロックは、(4,3,6)で、快苦の観念が、非物質的実体に存するのか身体自身に存するのかは人間には不可知であると主張している。

さらに、EMOでの、ロックの批判の要点は、実際は、観念を心の変様と見なしてもそれは観念の本性の説明にはならないという、心の変様という概念の説明力に対する不満であった。ロックによると、我々がスマイルの紫色を見た場合、我々の心を反省しても、我々は心の中の紫色の観念以上のものは得られない(39)。それゆえ、観念を心の変様と言ったところで、心の変様は紫色の観念を意味するだけであり、「感覚と変様は同一の観念を表している」ことになる(ibid)。観念を心の変様と見なした場合に生じる哲学的問題も「心の変様」が持つ説明力の無さの一因として示されている。たとえ観念を実体と見なそうと、心の変様と見なそうと、観念の本性は、我々が知覚内容として受け取る以上は明らかにされないのである(18)。この、観念の存在論的身分が認識論にとって問題にはならないということは、逆に、観念の存在論的身分として(特定の理論から中立

的な意味での) 心の変様を選択できる可能性を残している。ロックは観念を外的対象を理解する為の心的記号と見なしたが、一般に、記号はその本性が何であれ、その記号の使用能力と相関すれば認識論的役割を十分に果たす。例えば、ロックにおいて言語は観念の記号であるが(3,1,2)、言語の存在様式は、音声であれ活字であれ心像であれ、その認識論的機能には無関係である。この事情は観念にとっても同じである。以上から、私の観念分析が妥当であるならば、再考が要求されるのは、観念を心の「変様」と見なすことよりも、むしろ、ロックにおける曖昧な「心」の概念の方であろう。

4. 結論：ロックの観念が持つ存在論的身分

以上の結果を第一章で示された作用説の特徴と比較すると次のようになる。(L1) 知覚の機構の説明で用いられる実在的存在者は心と物質の対象に限られる。(L2) 観念は知覚作用ではなく、知覚における心の直接の対象は観念である。ただし、観念は心-依存적であり、知覚内容としての心の変様という形での心的存在者である。(L3) 物質的对象は、表象機能により我々に認知された限りでの観念として、あくまで間接的に知覚される。(L4) 知覚作用と知覚内容とは区別される。

まず、共通点に関しては、ロックの観念もアルノーの観念も心の変様であり、心的な実在的存在者とならずに物質的对象に関する知覚内容を表現する為のテクニカルな概念として機能している。(A2)(A3)(L2)(L3)は、まさにそのことを示している。マルブランシュを批判するロックとアルノーにおいて、観念は心-依存적であり、知覚内容と知覚作用とは不可分である。それゆえ、両者の観念説は共に余分な実在的存在者を増設しないことを眼目としている。

しかし、両者の観念説は次の点で決定的に異なる。それは、(A4)(L4)から明らかなように、作用説の場合、知覚作用は知覚内容とは区別すら不可能であり、結果としてその作用自体が観念として物質的对象の現れ方を決定するのに対し、ロックでは不可分な複合体を成す知覚作用と知覚内容とは区別され、後者が観念として物質的对象の現れ方を決定するという点である。この、ロックの観念説と作用説との違いの根本的原因は、第二章で述べたように、作用説とは異なり、ロックの観念が持つ、特定のものを表象する機能が、観念に内在的な性質ではなく、経験を通じて獲得された性質であることにある。アルノーが、知覚内容が存在し始める為の起源として、物体からの刺激と同時に、知覚作用が持つ、知覚内容を自ら産出する能動性を強調したのに対し(VFI,p.340)、ロックは

知覚作用の役割を知覚内容の決定に関して受動的役割に限定した。彼は心に関する存在論的考察を自分の経験論的認識論にとって不必要と見なし、心が知覚内容を所有するための条件を、心的作用ではなく物体からの因果に求めたのである。

この心的作用が持つ役割の限定は、ロックの知覚認識に関する心のシステムを、作用説と比べて、部分的には、より明解なものとして提示すると考えられる。作用説では、知覚作用が知覚内容を兼ねることになるが、その場合、作用が可感的な知覚内容を有し得る仕方は、心に特有の性質とされるだけで、それ以上の説明はなされなかった。しかし、ロックの観念説では、知覚作用が知覚内容としての役割を兼ねることなく、知覚内容の起源である物体の存在が因果を通じて保証されながら、その知覚内容が実在的ではない心的存在者として定立されるのである。たしかに、知覚内容を心から独立の実体と見なすことなしに表現するという点で、ロックの観念説と作用説の狙いは同じであったと言える。しかし、そのようなロックの狙いは、観念と知覚作用とを同一視することなしに展開される。ロックによる観念の規定は、知識の材料を経験のみに求める彼の方針に則したものである。

使用テキスト

Locke, J., *An Essay concerning Human Understanding*, Nidditch, P.(ed.),
Oxford U.P.(1975)

An Examination of P.Malebranche's Opinion of Seeing All Things in God,
(*Works*(10vols.), London(1823).vol.9)

Arnauld, A.,*Des vraies et des fausses idées,* (*Œuvres de Messire Antoine Arnauld*
(43vols.),Paris(1775~83).vol.38)

註

(1)Yolton, J., *Perceptual Acquaintance from Descartes to Reid*, Minnesota U.P.(1984),Greenlee, D., "Locke's Idea of 'Idea' ", *Theoria*, 33(1967)等。

(2)Yolton, op.cit., ch.5。ヨルトンは、実際、ロックが、観念の本性に関するアルノーとマルブランシュ間の諸論争を熟読していたと指摘している。

(3)本論におけるアルノーの観念に関する解釈は、Nadler, S., *Arnauld and the Cartesian philosophy of Ideas*, Princeton U.P.(1989)とYolton, op.cit., ch.3 に負っている。

(4)Nadler, op.cit., p.170

(5)ロックの言う能力の観念は、適切な状況において、ある存在者が恒常的にある現象を伴うという観察言明の一般化であり、ある対象が持つ素質的性質を意味する。後のヒュームと同様に、ロッ

クは因果関係の観念を現象の恒常的出現の観察から得られるものに過ぎないとし、原因と結果の間の必然的結合を認識論的に認めない(4,3,29)。

(6) Yolton, op.cit., p.89 等。

(7) ロックの「心の中」が場所的である理由を、観念が持つ表象機能の因果的説明に求める点については、Ayers, M., “Are Locke's 'Ideas' Images, Intentional Objects or Natural Signs ?”, *Locke Newsletter* 17(1986)に多くを負っている。

(8) EMOでのロックによる実在的存在者(実体)としての観念批判は他にも理由がある。例えば、ヨルトンはロックが「実体」という概念は観念の存在論的身分の解明に関して無益であると見なしていたことを正しく指摘している。Yolton, op.cit., p.93。

(9) ロックが快苦の観念を心の変様と見なしている点はエアーズも指摘するが、しかし、エアーズは観念を心の変様と見なすことを疑問視している。Ayers, op.cit., p.19。

[哲学博士課程]

The ontological status of Locke's ideas

—A comparison with Arnauld—

Seishu NISHIMURA

In this paper, my intention is to elucidate the ontological status of Locke's ideas. Generally "ideas" means the mental entities which are the objects of understanding. Recently some scholars reinterpreted Locke's ideas as perceptual acts and maintained the affinity of Locke with Arnauld. I, however, think it impossible to consider Locke's ideas as acts.

First, Arnauld's ideas are certainly perceptual acts. He denies ideas as real entities, criticizing Malebranche. Arnauld claims that ideas are modifications of the mind which are intrinsically representational. So, in his theory of perception, perceptual acts function as perceptual contents at the same time, and the direct objects of perception are the bodies themselves.

Second, Locke's ideas cannot be regarded as perceptual acts. In his texts, Locke considers ideas not as perceptual acts but as mental contents of perception. Moreover, he distinguishes ideas from the qualities of bodies and denies the direct perception of bodies. These ideas acquire their representational function just through their causal relation with bodies. This fact makes it fundamentally impossible to equate them with perceptual acts.

Then, does Locke's ideas become the redundant entities between the external world and the mind? Although Locke's ideas are not perceptual acts, they are mind - dependent, so they are always associated with acts. Locke's ideas can be interpreted as a different modifications of the mind apart from the acts. Like Arnauld, Locke uses the concept "ideas" technically to express perceptual contents without regarding them as real entities. But his aim is achieved without considering ideas as acts.